キタを愛する人たちのための、キタを再発見するマガジン。ネットに載らない情報テンコ盛り。

つひまぶ 踊る北区号

つながるひとまちぶんか

7月号 2016

北区魅力発信フリーペーパー「つひまぶ」vol.8　2016年7月15日発行（毎年3･7･11月発行予定）　**編集・発行:**つひまぶ実行委員会／大阪市北区役所＋北区のおもろ通信団（浅香保ルイス龍太・棚橋真理・松岡慧祐・山田寿也・依藤智子）＋大阪市職員ボランティア ＋ 協力：奈良県立大学地域創造学部　**連絡先：**大阪市北区役所（大阪市北区扇町 2-1-27）【tel】06-6313-9743 【fax】06-6362-3821 【mail】tsuhimabu@gmail.com 【blog】http://tsuhimabu.blogspot.jp（誌面に載せきれない情報はブログでね♥）　**定価:**0円　**主な配布場所:**大阪市北区役所･北区民センター･大淀コミュニティセンターほか多数（配布場所はブログにて随時お知らせします）
※当雑誌の内容、テキスト、画像、イラスト等の無断転載・無断使用を禁止します。

北区いきいき音頭

1989年（平成元年）、大阪市制100周年・新北区発足記念につくられた「北区いきいき音頭」。北区民カーニバルの「民踊総おどり」でも毎年選曲されています。さぁ、振り付けを覚えて、みんなで踊りましょう。隊形は輪踊りです（全員で円をつくり、時計まわりに立つ）。

踊りは型を覚えるだけでなく、振り付けの意味を理解しながら覚えると、より美しい踊りになります。最初の打ち出しは、さあ、みんなで踊りましょう！と、繰り出していくようなワクワクする気持ちを表現しています。手で空を仰ぐ振りは、美しい空と繁栄する高層ビルを、手で招く振りは、世界の友を招いて踊りましょう！という気持ちを、それぞれ表現した振り付けです。さらに、指先まで意識して、揃えて踊ると、よりキレイな踊りになります。以上、若柳流 若柳吉綾武先生に教えていただいた、コツでした☆（Ta-yang）

1

前奏八呼間を聞く。

2 一ツの二ツ

身体を少し右に傾け、両手を二度打ち出しながら、右足から三歩前進。

3 三ツの四ツ

身体を少し左に傾け、両手を二度打ち出しながら、左足から三歩前進。

4 五ツの六ツ

2の動作を繰り返す。

5 七ツの八ツ

3の動作を繰り返す。

6 九ツ十

身体を円の外に向け、横歩きしながら両手を開いて、閉じて、開く。

7 十一、十二

進行方向を向きながら左足を右足につけ揃えてチョン。
※チョンは手拍子のこと

8 十三、十四

身体を円の中に向け、横歩きしながら両手を開いて、閉じて、開く。

9 十五、十六

進行方向を向きながら右足を左足につけ揃えてチョン。
※チョンは手拍子のこと

10 十七、十八

右手で空を仰ぎながら右足から三歩円の中にまわり込み、四歩目の左足を上げる。

11 十九、二十

左手で空を仰ぎながら左足から三歩逆進行方向にまわり込み、四歩目の右足を上げる。

12 二十一、二十二

10の動作を繰り返して、円の外にまわり込む。

13 二十三、二十四

11の動作を繰り返して、進行方向に戻る。

14 二十五、二十六

右足を出しながら左手を顔の前に立て、右手で袖を押さえる。二十六は二十五の反対動作。

15 二十七、二十八

右足を出し、両手を「ちょうだい」の形にし、右足を引き揃えて両手を前に伏せ伸ばす。

16 二十九、三十

右手、左手、右手と招きながら、右、左、右と進み、左足を上げながら左手を開けかざす。

17 三十一、三十二

左手、右手、左手と招きながら、左、右、左と進み、右足を上げながら右手を開けかざす。
1から**17**を繰り返す。

動画で予習
↓

©UMEDA CONNECT

表現:
若柳流 若柳吉綾武先生

作詞：室田義正　補作詞：島田陽子
作曲：池田八声　歌唱：市川勝海

毛馬と長柄の　二つの橋を
過ぎて淀川　街を抱く
ここは北区よ　浪華の春は
桜あでやか　通り抜け　ソヤソヤ
水がいきいき　花がいきいき
老いも若きも　輪になって
北区音頭で　踊りましょう

ビルの向こうに　山なみかすみ
ばらの香りの　中之島
天満天神　かがり火燃えりゃ
胸もはずんで　船渡御よ　ソヤソヤ
祭りいきいき　笑顔いきいき
老いも若きも　輪になって
北区音頭で　踊りましょう

梅田　大阪　人波寄せて
西へ東へ　伸びてゆく
キタを歩けば　近松さんを
思い出させる　跡ばかり　ソヤソヤ
歴史いきいき　街がいきいき
老いも若きも　輪になって
北区音頭で　踊りましょう

桜青葉の　小径をゆけば
浦江公園　鳥が啼く
リバーサイドは　スポーツ盛り
声がひびくよ　団地まで　ソヤソヤ
緑いきいき　風がいきいき
老いも若きも　輪になって
北区音頭で　踊りましょう

北区よいとこ　銀杏の秋は
表玄関　黄金いろ
広い世界へ　こころの橋を
かけて大きく　はばたこう
夢がいきいき　明日がいきいき
老いも若きも　輪になって
北区音頭で　踊りましょう

Ondo

編集後記

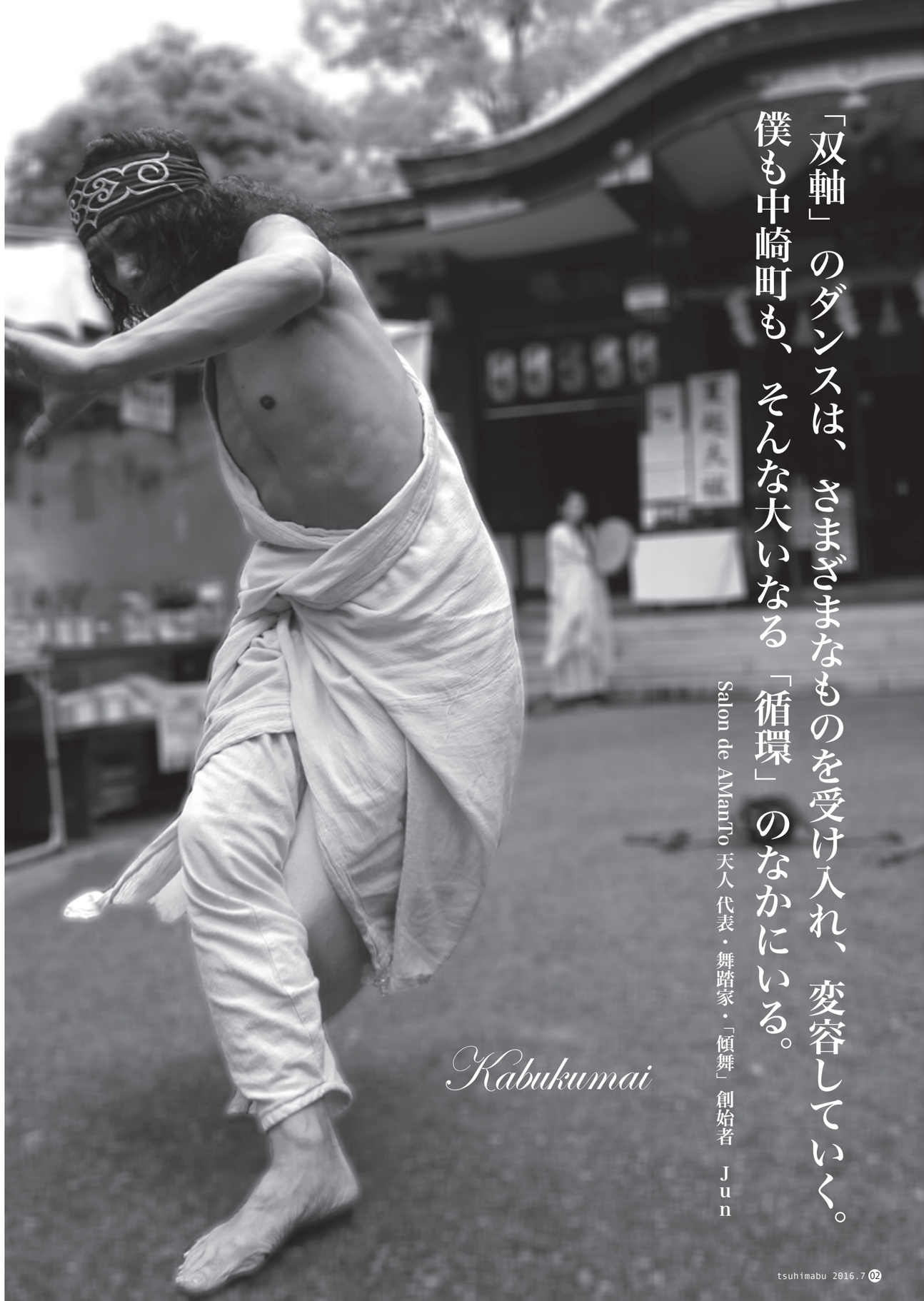
「踊る北区」いかがでしたか？ 「踊り」とひとことで言っても、じつにバラエティーに富んでいます。神に捧げる踊りや、思想や哲学をもとにした踊り、家族や大切な人を思う踊り、美しさを追求する踊りなどなど。ルーツも目的もじつにさまざまです。そして踊り自体もさることながら、やはり一番印象的だったのは、踊っている方々がみなさん魅力的だったこと。なんでだろうな？と考えてみると、踊るためには、一度恥ずかしさの殻を破り、自身の身体と心で思いっきり表現する、その歓びや楽しさを知っているからなのかな〜、なんて想像していました。取材はその人の人生や心情の一端を聞かせていただく貴重な機会。いつもその大切な部分をみなさんにお届けしたいな〜文章にするのは難しいな〜と試行錯誤しながら書いています。「踊る北区」を通して、「踊り」の魅力と、その大元にある「ひと」の魅力が、少しでも読んでくださった方にお届けできていれば幸いです。（ヨリトモ）

「つひまぶ」ブログ
毎週月曜更新
http://tsuhimabu.blogspot.jp

「つひまぶ」では、編集メンバーを随時募集しています。興味がある方は、Facebookにてご連絡いただくか、大阪市北区役所地域課区民協働担当（tel. 06-6313-9743）までご連絡ください。

「双軸」のダンスは、さまざまなものを受け入れ、変容していく。僕も中崎町も、そんな大いなる「循環」のなかにいる。

Salon de AManTo 天人 代表・舞踏家・「傾舞」創始者　Ｊｕｎ



空襲を逃れ今も残る長屋を中心に個性的なお店が点在し、今や国内外の観光客にも人気のエリアとなっている中崎町。路地を進んだ先の公園の裏手に、ひと際個性を放つ緑に覆われたカフェ「Salon de AManTo 天人」があります。その場所の生みの親であるＪｕｎさんは、さまざまなアーティストなどとともに、Salon de AManTo 天人をはじめとする複数の芸術発信拠点を運営する一方で、自身は「傾舞」という独自のダンススタイルを確立させ、国内外で活動するダンサーでもあります。

喘息に悩まされた幼少期のＪｕｎさんは身体が弱く、小学校１、２年生の頃はあまり学校にも行けなかったそう。そんな身体の弱さを克服するために武道武術をたしなみます。その経験が今のダンスにもつながっているのですが、Ｊｕｎさんが表現としてダンスを選びとるまでには、紆余曲折ありました。

子どもの頃に見たスターウォーズに憧れ、役者を志したＪｕｎさん。高校生の頃から養成所に入り、役者としての道を進みます。しかし、役者だけで食べていくのは厳しいもの。さまざまな制約のあるなかで役者業の肥やしになればとはじめたのが、大道芸でした。得意のアクロバットから、ジャグリング、バルーンマジックやパントマイムなど、客層に応じて演目を変えられるほどの芸を身につけたＪｕｎさんは、いつしか大道芸の現場を仕切るようになり、会社まで設立します。会社は軌道に乗り、大手企業との取引も出てくるなかで、資本主義のど真ん中へ。一方で、自然が大好きでオフに遊びに行くのはいつも川や山でした。環境問題にも関心が高く、消費型のビジネスと自分が本来大切にしたいものがどんどん乖離していくことに違和感を覚えたと言います。結果、軌道に乗っていた会社を友人に譲り渡し、自身はエンターティナーからアーティストへ転身するべく一念発起し、ヨーロッパへ渡ります。

ヨーロッパでアーティスト活動をはじめると、「日本人のアイデンティティーは？あなたのルーツは？」と、自身が何者であるのか、どんな文化を背景にした人間なのかを問われる機会に晒され、戸惑いのなかに置かれたと言います。「堀江生まれの堀江育ちなので、日本らしい暮らしを背景としたアイデンティティーがわからなかったんです」とＪｕｎさん。帰国後、日本らしい暮らしのできる場所を求めて探し歩き、たどり着いたのは、なんと、地元の大阪・中崎町でした。自分の地元である大都市・大阪にありながら、戦前戦後の匂いを今も色濃く残すこのエリアに惹かれたと言います。「お地蔵さんに囲まれたまちの中心にはなにかがあると思い、この場所を拠点にしたいと思ったんです。それで、大家さんに直談判。自分のやりたいことを伝え、なんとか貸していただけることになりました」。何度も説明し、最後にはやりたいことを伝えるために紙芝居までつくったのだとか。中崎町で住むため、生きるための拠点をつくるべく、たったひとりではじめた空家再生パフォーマンスは、通りすがりの人をも巻き込み、さまざまな人々の協力を得ながら、最後には１１２７人の人々を巻き込んで Salon de AManTo 天人のオープンへと結実します。２００１年（平成13年）、中崎町最初の古民家再生カフェの誕生です。

このプロジェクトに代表されるように、初めからこんなものをつくりたい！という明確な意志を持って旗を振ったわけではありません。活動を外に開くこと、さまざまなものを受け入れることで、地域や人々とつながり、そのつながりのなかで求められることが出てきて、それが次の展開へとつながり、現在の Salon de AManTo 天人グループのさまざまな拠点づくりや活動につながっていったと、Ｊｕｎさんは言います。

そんな地域や人々を巻き込んだ活動を続けるなかで、Ｊｕｎさん自身のアーティストとしての表現にもつながる、独自の哲学が確立されていきます。日本の文化、自分自身のアイデンティティーを探したとき、日本を含めた環太平洋の島々の部族の伝統的な祭りや舞踊から共通の身体感を見いだしたのだとか。

ダンスは身体の軸が重要ですが、西洋のダンスがひとつの軸の文化であるのに対して、日本をはじめとする環太平洋の島々では、ふたつの軸を駆使する身体操法を持つのだそうです。さらに、そのふたつの軸の間は、相手のために空いているのです。「こうするぞ！という一本軸の自己主張ではなく、双軸で真ん中を空けることで、周りを受け入れ、周りの人の役に立つことができるようになります。それによって周りから与えられるものや求められるものが生まれ、その循環のなかに自分がいるんです」。この、双軸という考え方が、まちとのかかわりからアーティスト活動である身体表現・ダンスまで、Ｊｕｎさんの多様な活動の根幹となっています。

Ｊｕｎさんの表現の代表作ともいえる「傾舞」は「武・舞・奉・禅」の４つの漢字で表されるコンセプトを持ち、前述の環太平洋に共通する身体感である双軸がベースになっています。さらに、幼い頃から親しんだ武道武術に日本伝統の歌舞伎や能を貪欲に吸収し、自身のアイデンティティーを探るなかから生まれたものです。

Ｊｕｎさんがダンスのなかで表現していきたいことをお聞きすると、「伝えたいものが明確にある、目的のある予定調和な表現ではなく、受け手に委ねながら表現するダンス。軸と軸の間を空っぽにして、見る人が自由に感じるような、伝わるものが受け手によってバラバラであるような表現ができればと思っています。島々の先住民の伝統舞踊を見たとき、そんなかんじだったんです。まさに、天然芸術です」。

予定調和の表現では、ショービジネスに代表されるように、お金があればたいていのことはできてしまい、最後には資本力の勝負になってしまう。自分がこの場所でそれを目指す意味はないと言います。「ガーナから来た難民の人が、僕のダンスを見て、声を出して笑ってくれたことがありました。会場全体はそんな雰囲気ではまったくなかったんだけど、彼は大声で笑っていた。そのとき、表現したいことが少しはできているのかなと思いました」。

地域やここに集う人々を受け入れながら、そのことで自身も変容していきながら、Ｊｕｎさんは表現しようとしています。双軸ゆえに、そのような「循環」が起こり、サスティナブルなものになっているのだ、と。

Ｊｕｎさんは華やかなエンターテインメントの世界へ飛び込み、やがて消費型の社会に違和感を感じ、エンターティナーからアーティストへと姿を変えました。そこから自分のアイデンティティーを探り、環太平洋の島人たちの舞踊などから自身のルーツにある双軸の身体表現へとたどり着きます。そのことは、身体表現のみならず、Ｊｕｎさんのあらゆる活動を貫く思考として昇華されていきます。「まちづくりの専門家らしいことはなにも知りません。僕は、踊るようにお店を経営し、踊るようにまちにかかわっています」。中崎町というまちから影響を受けながら、このまちでどんなことが求められているのか、どんな表現が喜んでもらえるのかを考え、カフェもまちづくりもダンスもすべてがつながりながら、自身も地域や人々の循環のなかで変化しながら、表現し続けている。私たちは、そんな、大いなる実験の現場に立ち合っています。（依）

7月26日（水）
「Salon de AManTo 天人」15周年のイベントが開催されます。詳細はホームページをご覧ください。
http://amanto.jp/

天神祭 地車講 龍踊り

熱く踊れ！ 龍は天に昇る！

天神祭で、ひと際異彩を放つ女性がいます。地車の前で龍踊りを踊る、小西登紀子さん。

小西さんは、大阪天満宮地車講初の、女性の龍踊りの踊り子です。

地車講の龍踊りは、地車講の前身の車楽講の頃からずっと、男性の踊りでした。女性も踊るようになったのは小西さんが初めてです。

天神祭にはたくさんの決まりごとがあり、女性が地車に触ってはいけないというのも、そのひとつ。そんななか、小西さんは「触れないのなら、地車の前で踊る！」と宣言して、龍踊りをはじめたそうです。幼い頃から見よう見まねで踊っていた小西さんの血が、そうさせました。

龍踊りは、地車囃子に合わせて踊ります。指は龍の珠をつかんでいる様子を表し、身体をくねらせ、龍が天に昇るように踊ります。小西さんによると、龍踊りに型はありません。みんな自己流。地車囃子のリズムを身体に染み込ませて、見て、踊って、覚えます。

「私、35年前の天神祭のとき、妊娠していたんです。まだ、安定期の前。でも、その年も踊りました。踊ってダメになるならそこまでやと思って、踊りました」。小西さんには、龍踊りと心中するかのような強烈な逸話が、たくさんあります。また、そんなふうにして生まれた娘さんにも、その熱狂は受け継がれています。お孫さんの出産予定日は7月24日。「これはいけない！祭に間に合わない」と、娘さんは6月末に帝王切開で出産。そして、生まれたばかりの子どもを連れて、天神祭に参加したそうです。

踊ることが身体の芯まで染み付いていて、地車囃子と鉦の音を聞くとどうしても踊ってしまいます。「テープではダメですね。生の音はやっぱりすごい。全然違います」と言って、自前の鉦を奏でてくださいました。「うちでは胎教からこれです」と。生まれる前から！ さらに「この鉦も、子どもが大きくなると大きいのを持たせていくんですよ」と、自前の鉦は大きさ別に何種類かつくっているのだそうです。もはや龍踊りの英才教育です。龍踊りを踊れる女性は、踊り子と血縁関係がある人だけなのだそうですが、小西家は、小西さんを筆頭に、娘さん、お孫さんと三代揃い踏みです。そんなことから、天神祭の日の写真や映像は、お孫さんたちの成長記録でもあります。

天神祭では、朝4時の一番太鼓から、宵宮、陸渡御、船渡御、そして宮入まで、踊りっぱなしです。「最初の5年くらいは、祭が終わると階段の上り下りができないくらいでしたね」と。それほど、踊ります。「好きじゃないとできない」と力強く語られます。「踊ってるときは、龍です。龍になりきってます。顔もいかつくなるし。最後にはもう、いっちゃってる状態。天神祭はいつも晴れているでしょう。一瞬は雨が降るけど、そのせいで暑くもなる。龍踊りはね、暑くないと踊れないんですよ」。

今年の春に足を痛めた小西さん。それでも「地車囃子と鉦の音を聞いたら、踊ってしまうでしょうね」と笑って話されます。いつ、どこで踊っているかは、祭の日のお楽しみです。（球）

Matsuri Dance

おなじ阿呆なら踊らな損々

阿波踊り 大阪天水連

お盆に訪れた徳島のまちは、うだるような夏の暑さに輪をかけて、人々の熱気に包まれていました。太鼓と鉦、笛などで奏でられる軽快な二拍子に乗り、「連」と呼ばれる踊り子のグループが踊り歩く阿波踊り。演舞場で繰り広げられる有名連の美しく力強い圧巻の踊りはもちろんのこと、夜のまちなかで、息づかいが聞こえるような距離でさまざまな連が踊りに踊るさまは、まち全体が緩急のある二拍子のリズムに乗ってうねり、踊っているかのような不思議な感覚にとらわれます。

数ある連のなかでも老舗連として有名な「天水連」は、1897年（明治30年）に発足した「南廓連」を前身とし、終戦後の1946年（昭和21年）、阿波踊りの復活が許されたとき「天水連」と改称されました。「天水」とは、阿波の方言で、「少しおめでたくて、調子がよく、ひとつのことに熱中しやすい人」のこと。戦争で傷ついた徳島を、自らが「天水」となり踊ることで元気づけようという思いが込められています。

そんな本場の阿波踊りの流れを汲む連が「大阪天水連」です。連長の廣田秀夫さんが所属していた天水連の大阪支部として、1995年（平成7年）に立ち上げました。廣田さんご自身は高校の同級生（現天水連の連長）に誘われたのをきっかけに、16歳の頃から阿波踊りに魅せられ天水連で踊られていました。社会人になり、地元を離れて大阪に転勤になってからも「本場の阿波踊りを踊りたい、見てもらいたい」という思いから立ち上げたと言います。

結成当時、メンバーはたったの4人。踊りを披露する場所もなく、自らのネットワークや、徳島県のPRと組むことで活動の場を開拓していったそうです。また、多くの人に阿波踊りの魅力を伝え、踊ってもらいたいという思いから、阿波踊り教室や高齢者の方にも気軽に楽しんでもらえる「らく天グループ」なども開催されています。現在では子どもからお年寄りまで150人という大所帯となり、年間70回程度のイベントで踊る連に成長。「練習を含めると3日に1回は踊っています。もう48年間踊っていますが、今後も踊り続けたいですね。当連での過去最高齢の踊り手は83歳ですから。まだまだヒヨコです」と笑う廣田さん。踊りに生きる男の素敵な笑顔です。

さまざまな場所で活躍されている大阪天水連ですが、北区では天神橋筋商店街での踊りや大阪天満宮での奉納踊りが有名です。天神橋筋商店街で踊るようになったきっかけは、2012年（平成24年）に天神橋筋商店街の活性化の一環としておこなわれた「徳島県フェアー・イン・天神橋」。徳島県の観光課から阿波踊りで盛り上げてほしいとお声がかかり、約70人の連で商店街を踊り歩いたのがはじまりです。翌年からは大阪天満宮で奉納踊りもおこなわれています。

「商店街では列を組んで踊り歩くパレード用の踊り、大阪天満宮の奉納ではステージ用に構成した踊りを披露するので、そのあたりの違いも見てもらいたい」と廣田さん。会場に合わせ、踊りを見せる構成もしっかり練られているのです。そんな本場の阿波踊りを身近で見てみたいという方は、8月21日におこなわれる大阪天満宮での奉納踊りへ。（依）

天神橋で跳ねる、

一説によると堺の石工たちが仙台城の移徙式（新築移転の儀式）の宴席で踊った踊りがルーツだとも言われる「すずめ踊り」。天満宮でも奉納演舞がおこなわれるなど、現在では、天満でもたくさんの人たちが踊っています。

世界へ翼を広げるアーティストダンサーの登竜門として 天満から「ダンスの融合、ダンスの発展、ダンスの発信」を掲げる！

天満から世界を目指す若きジュニアたちの登竜門を目指して

天満・天神バレエ＆ダンスフェスティバル 実行委員長 舞原美保子さん

■http://tenmatenjin.com/

Ballet

プロ・アマを問わず、ジャンルを超えたダンスの発展を目指す「天満・天神バレエ&ダンスフェスティバル」。中之島の中央公会堂で開催されるこのフェスは、今年の10月で9回目を数えます。また、現在では大阪のみならず、東京、札幌、福岡、ドイツでも開催されるほどに成長しています。才能あふれる子どもたちが世界に羽ばたいていけるようにとはじまった「天満・天神バレエ&ダンスフェスティバル」について、実行委員長でありチーフプロデューサーでもある舞原美保子さんにお話をうかがいました。

現在、日本のバレエ人口は右肩上がりに増え続け、月に数回、どこかでコンクールがおこなわれるほどだと言います。「日本でバレエを習っている幼い子どもたちのなかには、将来プロとして活躍することを目指している子どもたちがたくさんいます。でも、日本には、そのための道があまりありません。そんな子どもたちが羽ばたけるようにしたい、そのための機会をつくりたいんです」。舞原さんは、そんなふうにフェスティバル開催への思いを語られます。

フェスティバルは2部制で、第1部は一般応募の発表会。バレエでの参加が多くを占めますが、フラダンスやベリーダンス、日舞での出演もあり、すべてのジャンルが集まる、まさにダンス&バレエの祭典です。荘厳な雰囲気をたたえた中央公会堂の舞台で踊る体験は、得難い体験となって、子どもたちの心に残ります。第2部はエキシビション。このフェスのためだけのガラで、スペシャル・アーティストと共演することができます。こちらも一般応募。どちらも募集後、すぐにいっぱいになるのだとか。エキシビションでのスペシャル・アーティストとの共演も、とても貴重な機会です。「プロを目指す子どもたちに、プロが実際にどんな練習をしているのか、どれだけ練習しているのか、どんな意識で舞台に臨んでいるのかを肌で感じてもらえる、またとないチャンスです。練習から、その空気感を感じてほしいんです」。実際、フェスティバルのあとに参加者から送られてくる手紙は50通を超え、刺激を受けたことや感謝の言葉が綴られていると言います。

「夜の部のガラに出てくださる先生たちも、本来ならありえないような出演料で快く出演してくださいます。それが本当にありがたくて。本当に、感謝、感謝の気持ちしかありません」。

また、エキシビション参加者には、協賛企業からのプレゼントが手渡されると同時に、ミュンヘン国際バレエ・セミナーワークショップの参加権が授与されます。世界にアクセスする具体的なチャンスが、ここにはあるのです。このワークショップには、毎年20名ほどが参加するとのことです。まさに、舞原さんがフェスティバルを通じて実現したかったことが、これです。

国際バレエフォーラムの実行委員でもある舞原さんは、毎年、世界のバレエ学校やバレエ団、コンクールの視察もおこなっています。「日本のバレエはクラシックが中心ですが、特にヨーロッパの国立バレエ団のオーディションでは、コンテンポラリーの比重が大きくなっています。クラシックができても、それだけではダメなんです。そうしたことから、フェスティバルのエキシビションにも、必ずひとりはコンテンポラリーを入れていきたいと考えています」と、プロを目指す子どもたち本位の取り組みになっているのです。

「中央公会堂はドイツのグッキンゲンにある舞台とよく似てます。あの会場では赤ん坊も泣きやむんです。見えない力が働いているよう」。公会堂から世界に羽ばたく子どもたちを夢見て、舞原さんは今日も奔走されています。（球）

国道1号線を南森町交差点から西へ少し行ったところにあるJSKビル正面玄関前の時計には、ヘノヘノモヘジで描いたような顔のオブジェがある。ヘノヘノモヘジがそれぞれ自転していて、それによって顔の表情が変わる。まるで顔のダンス！

「きこえる人」「きこえない人」の間にある 心のバリアをぶっ壊す 手話で魅せるダンスはバリアクラッシュ！

Sign language

一般社団法人手話エンターテイメント発信団

oioi

■http://www.oioi-sign.com/

「手話はエンターテインメントになり得る」。手話の可能性を見いだし、発信している「ｏｉｏｉ」。

手話を盛り込んで繰り広げられるパフォーマンスは、その無理のない動きから、手話の新しい一面を切り開いたのではないかと思わせてしまうほどダイナミックです。それもあってか、観客からは「手話って、暗くて地味なものだと思っていたけど、魅力的ですね」といった声をよく聞くそう。

一朝一夕に、今のパフォーマンスがつくられたわけではありません。

聴覚障がい者は音楽に触れる機会が少ないため、リズム感という概念を持っていない場合があります。また、手話特有の抑揚やリズムが、音楽のそれとは異なっているという課題もあります。そこで、音楽の世界観を聴覚障がい者にも伝わりやすくするため、ダンスに物語の要素を加えるなどの工夫をして、誰もが楽しめるパフォーマンスをつくりあげていっています。さらに、現在は、観るだけではなく誰もが参加しやすい「手話リズム」を開発中。単調なリズムと振り付けで覚えやすく、日常会話の手話単語を楽しく表せるそうです。

「ステージはそれ自体が楽しいし、観客が楽しんでいる姿を目にすると、さらに気持ちが盛り上がります。パフォーマンスを通じて観客と楽しさを分かち合えることが最高の醍醐味で、自信もつきます。最初は暗かったパフォーマーが、だんだんと明るくなり、積極的に行動するようになるんです」と語るのぶさん（代表）ときぬさん（副代表）の表情は、生き生きとしていました。

「きこえる人」と「きこえない人」の間にある心のバリアを壊す「バリアクラッシュ」。バリアフリーな世界になることを願うだけではなく、自らの手で積極的に実現させようと、ｏｉｏｉは、今日もエネルギッシュに活動しています。（Ｔａｌｙａｎｇ）

「家族」のようなチームでエイサーを踊る

Eisa

琉球の島々を思い、踊る、創作エイサー

やぁにんじゅ太鼓 *OHANA*

■https://www.facebook.com/yaninjuohana/

八重山、沖縄、奄美をひとくくりとした創作エイサーで見ていただく方に元気をお届けできれば！という思いで踊っている、「やぁにんじゅ太鼓 *ＯＨＡＮＡ*」。「やぁにんじゅ」とは琉球言葉で「家族」。「ＯＨＡＮＡ」はハワイ語で、やはり「家族」という意味。

このチームは年齢制限もなく出身地も問わないため、活躍するメンバーが3歳から60代と幅広く、「家族」のように団結しているのが強みです。普段は奄美の島会を中心に、保育園や老人施設、地域のイベントで踊っていますが、関西かごしまファンデーのオープニングや、宮城野部屋激励会では白鵬関の前で踊り、出演の場を広げています。

「家族」には、さまざまな壁や歴史を超えて琉球がひとつになることへの願いが込められています。その思いは衣装にも表れていて、八重山のミンサー織り、染めは沖縄の紅型、奄美の大島紬など、琉球各地の伝統が随所に散りばめられているのです。

リーダーの林由紀さんは北区在住。エイサー好きの人が集まってチームを組んだとき、奄美大島の加計呂麻島出身のお父さんのおかげで奄美の島会に出演させてもらったのが最初です。今後も「家族」のようなチームで、エイサーを通じて観客に元気を届けることで、自分たちも活力をもらえたらと言います。

昨年は豊崎神社夏祭りでエイサーを披露。奄美出身の方が宮司さんに紹介してくれた縁で実現しました。参道を練り歩き、観客との距離が身近に感じられたことは、新しい体験だったそうです。

豊年音頭のような祝いの踊りでは大きな振り付けで観客を楽しませ、ヨイスラ節などの信仰に基づいた踊りでは、琉球の島々への敬意を表す…。伝統を踏まえながらも、新しい時代に向けて発信する踊りが魅力的なチームです。（ＭＩＫＡＷＡＮ）

Shall we dance?

ロイヤルダンス同好会

http://dance.midokoro.com/royal/

役所広司演じる経理係長は、通勤電車から見えるダンス教室の窓にたたずむひとりの女性の美しさに心を奪われ、社交ダンスの門を叩く。そんな、よこしまな心からはじめた社交ダンスだけど、個性的な仲間との交流を通じて、純粋にダンスにのめり込んでいく…。あのハートフルコメディの傑作が上映されたのが、1996年（平成8年）。日本での社交ダンスの歴史は鹿鳴館時代にさかのぼりますが、何度かの節目を経て、ますます隆盛を極め、現在の日本での競技人口は160万人とも言われています。

もちろん、北区のあちらこちらでも、社交ダンス教室はお盛ん。なかでも「ロイヤルダンス同好会」は、群を抜いた活動量を誇っています。

北区民センターをはじめとして大阪市内を中心に毎月40回以上のパーティを開催し、1993年（平成5年）に立ち上げて以降、延べ人数にして100万人の参加を得ているとのことです。

西部（西日本）チャンピオンやファイナリストなど、プロ選手も5人在籍。リボン（経験豊富な競技者、アテンダント＝リードしてくれる人）も豊富で、A級・B級を軸に15人、大学生チャンピオンや学生などのボランティアを含め、総勢約50名のスタッフが、適時会場ごとに派遣され、同会主催の盛大なパーティが、今日もどこかで開催されているわけです。

もちろん、中之島の中央公会堂でも。正装で臨むパーティがこれほど似合う場所は、北区にはありません。その公会堂でも、すでに800回以上のパーティを開催してきた実績を誇っています。

また、池田市で開催したダンス・カーニバルでは、世界大会9連覇を誇るマーカス&カレンのイギリスチームを呼ぶなど、その活動はとどまるところを知りません。

「社交ダンスの醍醐味は、なんといっても、触れ合いがあること。また、初めての相手と踊るので、そこには一期一会の歓びがあります。そして、成果発表ですね」。

代表を務める潮崎さんは、社交ダンスの魅力をそんなふうに語ってくれました。また、「ボケ防止にもなるし、美容と健康にもいい。ロイヤルダンス同好会では、パーティの参加は、1回につき約800~1100円です。800円でボケ防止&健康づくりができる幸せ者ばかりなんです」とも。上手下手関係なく、全員で楽しむのがモットーのロイヤルダンス同好会。その敷居の低さも、活動が大きくひろがっている要因のひとつなのかもしれません。役所広司のようにちょっと勇気を出して一歩を踏み出せば、そこには、「Shall we ダンス?」の世界がひろがっています。（ルイス）

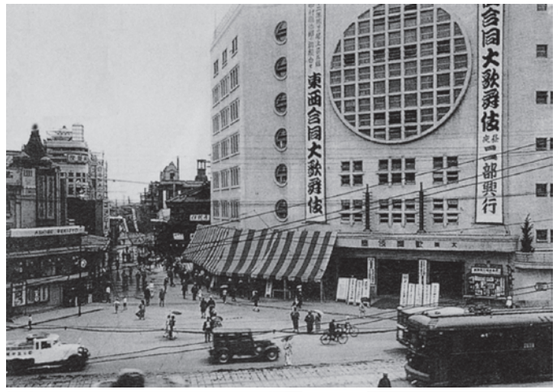
現代に残る、かつての名残

まちの記憶

そんな時代もあったね……。

大塚善章さんに聞く 1950年代大阪のダンスホール

祭屋 梅の助 井上 彰



●千日前の歌舞伎座
千日前楽天地の跡地に建てられた歌舞伎座。1932年（昭和7年）にこけら落とし。
1958年（昭和33年）に「新国劇サヨナラ公演」で閉館。
その後は千日デパートに改装されるが、1972年（昭和47年）に千日デパート火災の惨事が起きる。
焼け跡は長期間放置されるが、1983年（昭和58年）に取り壊されて、現在はビッグカメラに。

●古谷充とザ・フレッシュメン
アルト・サキソフォン奏者の古谷充（たかし）が北野タダオとアロー・ジャズ・オーケストラ等を経て1959年（昭和34年）に結成。後列左から右まわりに、寺崎康幸（tp）、古谷充（Vo & Sax & Fluet）、奥村博一（B）、大塚善章（Pf）、ジュニア坂本（Vo）、青山栄次郎（Dr）。

●昭和のダンスホール

1920年（大正9年）、横浜に日本初のダンスホール〝花園園〟が開設されて、ダンスブームが到来。しかし1923年（大正12年）の関東大震災で東京の倶楽部は壊滅し、ダンスの中心は神戸・大阪・京都に移ります。

3年後の1926年（大正15年）12月25日、大正天皇崩御。ところが大阪のダンスホールはどこもクリスマスパーティで浮かれており、号外が出たことにも気付きませんでした。その結果、大阪のダンスホールは営業禁止になってしまいます。大阪でダンスホールが解禁されて、再びダンスブームがよみがえったのは戦後のことでした。

今回は、関西ジャズ協会の重鎮でジャズ・ピアニストの大塚善章さん（82）に、1950年代の大阪のダンスホールの様子やジャズにまつわる話をうかがいました。

アローでドドンパ

北区堂山に、1958年（昭和33年）開業の東洋一のナイトクラブ「アロー」がありました。クラブ・アローにはエルニー&ダニーというフィリピン人の専属ダンサーがいて、オフビート・チャチャチャのショーをやってました。

オフビート・チャチャチャは2拍目と4拍目のアクセントに乗って踊るのですが、当時アローの美人ホステスだった古谷せつ子（通称「チャン姉」）と古谷充の嫁のペコが、ステップを踏むとき、コンガに合わせて何気なく「ドド、ンパッ」って口ずさんでいたんです。それをアローに事務所があったターゲットプロ社長の古川益雄が聞いて、『おもしろい！』と言うんで生まれたのが〝ドドンパ〟でした。ドドンパのリズムを考えたのは、アロー・ジャズ・オーケストラでパーカッションを叩いていた津野晴夫です。

僕は「アローでドドンパ」という曲を書いて、当時ラテン歌手として売り出し中のアイ・ジョージと坂本スミ子がデュエットで歌いました。ドドンパはクラブ・アローの連中が寄ってたかって盛り上げたんです。話題は広まり、キタの新地のホステスさんやお客さんが連日連夜、アフターでアローに押しかけてドドンパで大騒ぎになりました。1961年には渡辺マリが歌う「東京ドドンパ娘」が、大ヒットしました。

千日前の勤労者ホール

昔の歌舞伎座（今のビッグカメラでかつての千日デパート）の上に「勤労者ホール」というダンスホールがありました。その上はアルサロ（アルバイトサロン）の先駆けとなったキャバレー・ユメノクニで、さらにその上には進駐軍専用のダンスホールがありました。

勤労者ホールは、当時のBG（ビジネス・ガール）が、仕事帰りにダンサーのアルバイトをしていたホールです。演奏は市大や阪大の学生バンドが入っていて、僕は浪人中でしたがそこでピアノを弾いてました。勤労者ホールはチケット制で、ワンチケットで3曲続けて踊れるんです。チケットごとにお相手を変えるシステムでした。

ダンス初心者にはホール専属のダンスの先生がステップを教えてくれました。習ったステップはすぐに踊りたいけれど、アルバイトの女の子ではお相手がつとまりません。だから踊りに熱心な人は心斎橋にあった「うるわし」に通いました。そこは全員がベテランのおばちゃんダンサーで、どんな踊りのお相手もOKでしたから（笑）

キタにも梅新東のあたりに、「エンバイア」や「パレス」、「中央ダンスホール」などがあって、どこもにぎわっていました。ダンスホールは店ごとに専属バンドが入るんですが、勤労者ホールが閉鎖になってから、僕は中央ダンスホールで演奏するようになりました。僕の場合は演奏専門でしたが、ダンスのインストラクターをやっていた友だちもいましたし、今でもタンゴを踊ろうと思えば、踊れますよ（笑）。

梅新東にたくさんあったダンスホールも新御堂筋ができるときに立ち退きになって、すべて消えてしまいました。今から思えば、あの頃は何もかもが目新しくて、活気があって、おもしろい時代でした。

「チャチャ」と「銀馬車」

僕が関大に入学した頃に、ちょうどジャズ喫茶が登場しました。ジャズ喫茶といってもレコード喫茶ではなくて、今でいうライブハウスです。当時は珈琲1杯30円から50円が相場のところ、ジャズ喫茶は80円から100円で、ジャズの生演奏が聴けました。今の駅前第4ビルのあたりにあった「チャチャ」が、大阪で最初にできたジャズ喫茶でした。僕はチャチャで古谷充と出会って、プロになりました。

ミナミの坂町には「銀馬車」というジャズ喫茶がありました。銀馬車は神戸三宮のジャズ喫茶「コペン」のオーナーが出した店で、僕らはドラマーの猪俣毅さんのバンドとともに、銀馬車の専属バンドに雇われました。おかげで大阪の「銀馬車」、神戸の「コペン」、京都の「ベラミ」の3店を掛け持ちでまわり、仕事には困りませんでした。

銀馬車には、浜口庫之介とアフロ・クバーノ、ハナ肇とクレージーキャッツ、小野満とシックスブラザーズ、河辺公一とオールスタージャイアンツ、エディー岩田とポークチャップス、鈴木章治とリズム・エース、与田輝雄とシックス・レモンズなど、東京の有名どころがみんなやって来ました。

彼らは50年代から活躍を続けるミュージシャンですが、ダンスホールやキャバレー、進駐軍のキャンプなどで演奏しながら日本のジャズを盛り上げた人たちです。東京からやって来たバンドは全部聴きましたが、刺激を受けて、勉強になりました。

銀馬車ではピアニストの世良譲さんとも出会っています。世良さんにはずいぶんかわいがってもらいましたが、音楽のことは何を聞いても『まぁ、そのうちにわかるよ』って、何も教えてくれませんでした（笑）。僕にかぎらずミュージシャンはみんな独学で、見て、聴いて、感じて覚えるしか方法はなかったんです。僕は演奏の合間に時間があれば、いろんなバンドの演奏を聴くため、他のダンスホールやキャバレーにしょっちゅう出かけました。

ジャズ喫茶の銀馬車は、1958年（昭和33年）に第1回の日劇ウエスタンカーニバルが大成功した頃から、小坂一也とワゴン・マスターズやジミー時田とオールスターズ・ワゴンなどのカントリー&ウエスタン、ロックンロール系のミュージシャンの出演が増えていきました。それが時代の変遷だったんでしょう。ロックンローラーのほうが若くて男前で、女の子にもキャーキャーとモテましたからねぇ（笑）

●ゴールデン・シニア・トリオ
2015年（平成27年）7月5日、平均年齢が84歳で世界最高齢バンドとしてギネス世界記録に認定された「ゴールデン・シニア・トリオ」。
写真右から、ベースの宮本直介（79）、ピアノの大塚善章（82）、ビブラフォンの鍋島直昶（90）、ギネス記録認定員。

●大塚善章

●クラブ・アローの庭園で、北野タダオとアロー・ジャズ・オーケストラ。

【井上 彰】
昭和24年生まれ。キタを舞台にした伝説のフリーペーパー「あるっく」の編集・発行人。取材、執筆、編集、広告営業のみならず、果ては自転車に乗ってポスティングまでこなしたスーパーエディター。「あるっく」はやがて「天満人」に発展し、発売1ヶ月で初版3,000部を完売するも、平成7年に惜しまれつつ休刊。その後イタリア風食堂『祭屋梅の助』を5年間続け、平成27年3月にリセット。生き方を整理しながら『天満人』の続編発行を計画中。

【祭屋 梅の助】
大阪市北区天神橋1-14-8
tel.090-3058-8947
夜のみ完全予約の社交場。詳しくはお問い合わせを。

天神橋1丁目にある週間マガリ。日替わり店主のカフェ&バーです。店主によって、講演だったりワークショップだったりと、企画もさまざま。好きなコトで盛り上がるもよし、気が向いたときに立ち寄るもよし。友だちの家に遊びに来たような感覚で楽しめます。

駅探
えきたん
大阪駅
Osaka

全国唯一 JR駅構内にある「祈祷室」

JR大阪駅に「祈祷室」が設けられているのをご存じですか？

2014年10月22日に、駅直結のサウスゲートビル1階、南ゲート広場の西端に開設されました。

大阪ステーションシティ・インフォメーションにて事前に申し込み、利用します。事前といっても、空いていれば、申し込んですぐに利用できます。ただ、利用時以外は施錠されているので、申し込みをしないと、利用できません。個人でも団体でも利用できます。1回につき、最長20分の利用。

駅構内に祈祷室があるのは、全国でもJR大阪駅だけだそうです。交通施設だと関空と福岡空港、大阪市内の公共空間だと、なんばCITYにあるきりです。なぜか、本町のハードロックカフェ大阪にもあります。

増え続けるインバウンド対策として開設されたのはもちろんだけれども、そもそも、それ以前から、JR大阪駅構内の人目につかない場所で祈祷をする人がかなりいたのだそうです。そうした事象が散見されたことを受け、2013年夏にマレーシア、インドネシアからの直行便が関空に乗り入れたのを機に本格的な調査を開始し、2014年のオープンに至りました。

祈祷室は、男女別々で礼拝できるよう、部屋が分けられています。大人が10人入れるかどうかというスペース。また、礼拝前に身体を清めるための小浄施設も設けられています。足を洗うシャワー設備のようなものです。天井を見上げると、方位記号がプリントされており、たとえばイスラム教だとメッカのある方角がわかるようになっています。ある方角には黒い小さな点がプリントされていて、それがまさにメッカの方角です。床には絨毯が敷かれています。

多い日には1日数十名の利用があり、おそらく、ほとんどがイスラム教徒の方だけれども（予約申し込み時に宗派は聞きません）、まれに仏教徒の方も利用されるのだとか。瞑想する場所として利用されているようです。もちろん、どんな宗教の方でも利用できます。

旅行者のみならず、居住者の方もいます。つまり、リピーターです。梅田には公共空間に祈祷する場所がなく、そのせいで、旅行者のみならず、居住者の方も利用しているのだそうです。そういえば、少なくともキタ界隈にはイスラム寺院はありません。

イスラム教では1日に5回礼拝します。4回目の礼拝の時間は、日没直後。すると、夏だと19時を超えます。そういうことから、利用時間が11時～19時だったものが、夏季のみ20時までとなりました。

どこかの宗教に偏った施設ではないし、宗教的な装飾もなにもない、無機質なスペースではあるけれども、清浄な雰囲気がずっと保たれています。落書きなども、もちろんない。きっと、利用する人が神聖な気持ちで利用するからなのでしょうね。

入口には外国語で書かれたハラルなお店の紹介チラシ（大阪ステーションシティ内にあるのですよ！）をはじめ、外国人向けの情報が充実しています。（ルイス）

インディーズ系社会学者の
北区マップ 考現學

『グーグルマップの社会学 ――ググられる地図の正体』

著：松岡慧祐（光文社新書）

現代社会は、地図が遍在する社会である。そうした社会を生きる私たちは、地図を「マップ」と呼ぶことで、その存在をますます身近なものにしてきた。しかし、そうした地図は、身近に遍在するがゆえに、さして気にもならないあたりまえの存在にもなっている。（本文より）

今号から、この新コラムを担当するインディーズ系社会学者こと松岡慧祐（奈良県立大学地域創造学部専任講師）です。今回は名刺代わりに、新刊の拙著を紹介させていただきます。

私は、地図を社会学的に研究しています。こう言うと、不思議そうな顔をされることも少なくありません。「地理学とは違うの？」「古地図を研究してるの？」「地図オタクなの？」、こんな反応もしばしば。しかし、私は、みんなにもっと開かれた新しい地図論を探究すべく、私たちの身の周りにあふれる多様な地図が、この現代社会のなかで果たす役割について考えています。

そのなかでも近年、急速に私たちの生活に浸透してきたのが、本書の主題にある「グーグルマップ」のようなデジタル地図。それによって誰もが、スマホでいつでもどこでも全世界の地図をググる（検索する）ことができるようになりました。また、自動的に地図の中心に自分の居場所を表示してくれるGPSも、目的地に移動するうえで、とても便利な機能です。私自身も、いつのまにか、そんなグーグルマップのとりこになってしまいました。

けれども、それは「見たいものしか見ない」という個人化・断片化した地図の見方をユーザーに促しています。地図は古来から、個人が直接見わたすことのできない「世界」や「社会」の全体像を視覚化するメディアとして、人々の想像力をひろげてきました。一方、グーグルマップでは、もっぱら「いま・ここ・わたし」を中心とした断片だけが切り取られるようになっているのです。それはグーグルマップがスマホという携帯機器のなかに入り込み、検索機能・ナビゲーション機能を強化することで、「見わたす地図」というより「導く地図」としての詳しさや便利さを追求してきたからにほかなりません。

現地のことは、現地に行けばグーグルマップが教えてくれる。そんな安心感と引きかえに、地図を主体的に読み込み、全体を見わたそうとする想像力は失われつつあるのではないでしょうか。本書では、このような問題提起を中心に、現代において地図のあり方はどのように変わってきたのか、そして、それは地図と人間・社会の関わりをどのように変えるのかを多面的に論じています。

とはいえ、アナログの地図が、その役目を終えたわけではありません。冒頭に記したように、この社会には、至るところに地図があります。特に北区のように都市文化が発展したまちでは、それだけ多様な地図が生まれます。地図は、単なる道案内の道具ではなく、その時代の文化や生活を映し出し、形づくる存在でもあるのです。そんな地図を通して、現代について考えること――地図の「考古学」ならぬ「考現学」を、これから北区という格好のフィールドで実践していきたいと思っています。そんな一風変わった地図論、もといマップ論を、どうぞお楽しみに。

（松岡慧祐）

大淀ですでに13回も開催されているテングマルシェ。年4回の開催。回を重ねるごとに出店数も増え、2フロアの会場にはブースがぎっしり！廊下まで会場と化しています。ビルなかマルシェなので天候の心配もありません。場所は大淀中学校南の交差点すぐ。

北区 銅像巡礼

あこや楽器店 北島三郎像

黄金の北島三郎。天神橋筋商店街の真ん中あたりに立っています。黄金でできているわけでも銅でできているわけでもないですが…。黄金なだけでなく、笑顔で、首から花輪を下げ、胸には達筆な字で「演歌は日本人の心」と書かれた紙が貼りつけられています。銅像に装飾！　銅像といえば、高い台座に乗っているものが多いですが、こちらの台座は低く、ほぼ地面と変わりません。おかげで、銅像に触ったり、一緒に写真を撮ることができます。この、異色で親しみやすい銅像は、お店の目印であるばかりか、もはや商店街の名物のひとつにもなっています。

北島三郎さんは歌謡界の大御所であり、「サブちゃん」の愛称で親しまれ、大人から子どもまで知らない人はいない有名人です。北海道に生まれ、20歳になる前に上京し、のちに演歌歌手となりました。2013年に50回目の出場を機に「紅白」引退、毎年おこなっていた梅田コマ劇場での公演もここ数年はお休みしているものの、歌手としては今も現役です。その「サブちゃん」の像が、なぜ天神橋筋商店街のあこや楽器店にあるのでしょう？

そもそも、この銅像が置かれるようになったのは、十数年前のこと。北島さんの所属するレコード会社が販促品としてつくり、持ってきたのでした。当時何体つくられたのか、どこに置かれていたのかはわからないそうです。ただ、数年前に当のレコード会社が「返してほしい」と言ってきたことがありました。あこや楽器店としては、店頭に置いており、「店の看板になっていて、目印にしているお客さんもいる。返してしまうと困る」と、断った経緯があるそうです。そのときにレコード会社に返したお店もあるでしょうから、もしかすると、まちなかで見られる「サブちゃん」は、今ではあこや楽器店だけかもしれません。

「サブちゃん」が目印のあこや楽器店は、演歌に力を入れているお店です。演歌歌手のサイン入りポスターが並び、店頭では新曲発表のイベントがおこなわれます。お客さんは60歳代以上が多く、目当てのCDやカセットテープを求めて遠方からやって来る人もいるのだとか。今では珍しい、カセットテープの棚も充実しています。カセットテープは、「歌の途中で巻き戻せます。それができるのはカセットテープだけ。カラオケの練習には欠かせません」。

また、昔の歌もよく売れます。「今はなかなかヒット曲が出ませんね。ヒット曲を出すのは難しいんです。一番は歌手の歌唱力。でも、いくら歌唱力があってもそれだけではダメで、ほかの人がまねできない独自の才能と、まねをしたくなる魅力が要りますね。まねのできそうにないものは、いくらよくっても売れません。これが難しいところ。

「北島三郎はすごい人です。あんな人はほかにはいません。『まつり』も『与作』も、あんな歌はほかにはないですね。あれを歌えるのは北島三郎だけです」。

北島さんの才能、魅力についてじっくりうかがっていると、あこや楽器店で今も売れ続ける戦前の歌手や歌のように、北島さんもこれからもずっと愛され続けていくのだと確信したのでした。（毬）

北区 モノづくり最前線

――第六回目――

ヘアドネーションで髪に恩返し NPO法人 JHDAC（ジャーダック）

「ヘアドネーション」という言葉を知っていますか？

「髪の毛の寄付」という意味ですが、この活動を日本で唯一おこなっているNPO法人が豊崎にあります。

今回は、病気などで頭髪の悩みを抱えている18歳以下の人を対象に、全国からの募金と寄付によって集められた髪を使ってフルオーダーメイドの医療用ウィッグを作ってプレゼントしている、Japan Hair Donation & Charity（ジャーダック）の事務局長・渡辺貴一さんにお話をうかがいました。

設立は2009年。渡辺さん自身が美容の仕事に携わっていたので、自分の職業にふさわしい社会貢献で「髪に恩返しをしたい」という思いから、日本ではなじみの薄かった、ヘアドネーションというボランティア活動にたどりついたそうです。「切った髪をなにか役立てられないか」ということを考えて設立したのですが、ウィッグを必要としている人が意外に多いことを感じたそうです。

人工のウィッグではなくて人毛にこだわる理由は、見た目が人工のそれに比べて自然で、着用していてもウィッグと気付かれないのと、提供する側も自分の髪を役立ててほしい！と望んでいる方からの寄付だから。18歳以下の子どもたちにプレゼントを限定している理由は、人毛のウィッグは市場に存在するけれども、既製品は大人サイズがほとんどで子どもには大きすぎて、逆に不自然になってしまうからなのだそうです。

また、フルオーダーウィッグは高額のため、なかなか手が出ないという現実もあります。

医療用ウィッグを製作するには、長さ31cm以上の髪が必要。詳しい寄付方法はジャーダックのサイトに掲載されています。

ウィッグを必要としている人たちは、「普通の生活を取り戻したい」と感じているので、思春期の学校生活を送るうえで、本人だけにかぎらず保護者や親権者にも心配事を少しでも軽減する手助けをできるのではないか、そのために本人にジャストサイズの人毛のフルオーダーウィッグの必要性を感じたそうです。

寄付するものが髪のため、寄付する髪をカットする賛同美容室も全国各地にあります。賛同美容室のなかには、ウィッグを待っている子どもの頭の採寸や完成後の仕上げカットなどもボランティアでおこなってくれる美容室があるのだとか。

思春期の子どもたちの気持ちに寄り添い、笑顔を取り戻す活動が、豊崎でおこなわれていたのでした。

（MIKAWAN）

NPO法人 Japan Hair Donation & Charity（ジャーダック）　所在地●大阪市北区豊崎3-8-18　設立●2009年9月　HP●http://www.jhdac.org
事業内容●18歳以下の子どもにフルオーダーメイド医療用ウィッグの製作・提供

彼女とキタのラブストーリー
――第八回――

バリ舞踊プルナマ・サリ主宰
田中千晶さん

小雨の降るなか、2列に並び、踊る女性たち。透けるように白く柔らかいブラウスにおそろいの黄色の帯はスカーフのよう。スカートのように巻かれている布は、色とりどりで華やかです。

バリの衣装をまとって踊る姿は、露天神社の境内にとてもなじんでいました。

途中、音楽が途切れるアクシデントがあったのにもかかわらず、動じずに踊り続けていたのは、先頭で踊るバリの人間国宝、ニ・クトゥット・アリニ先生の力強い動きと歌声のせいだったのでしょうか。

内なる場所からあふれ出てくる音楽に乗せて踊る姿は、圧巻のひとことです。空気が変わり、周りが浄化されていくように感じられました。

露天神社でバリ舞踊の奉納がおこなわれたのは、去年の秋のこと。この奉納舞踊を主催されたのが、今回お話をうかがう田中千晶さんです。

村のようなつながりのある曽根崎

千晶さんは、曽根崎幼稚園、曽根崎小学校、菅南中学校を卒業。露天神社で書道を習い、茶屋町のそろばん教室に通っていた、生粋の梅田っ子です。幼い頃から露天神社の夏祭に参加し、曽根崎を離れた今でも祭にかかわっています。「人がだんだん減っていって、女の子の出番が増えていったんですね。その1期生が、私の世代なんです」。

てこ舞からはじめ、中学生になると四つ竹、それから獅子舞と、できることがどんどん増えていったそうです。今では地車囃子として鉦や太鼓を打ったり、（龍踊りを）踊ったりする千晶さん。バリ舞踊の奉納に合わせておこなわれた龍踊りでも、太鼓を打つ千晶さんの姿がありました。

露天神社の夏祭は、役太鼓、舞獅子、地車囃子の氏地巡行で構成されています。なかでも夜8時頃からおこなわれる宮入は壮観です。その祭を支えているのは、地域の人だけではないそうです。「住んでいる人が減っているので、そこだけではとてもとても。準備だけでも2ヶ月くらいかかります。私以外にも、地域を離れたあともずっと祭に参加している人はたくさんいます。それに、他の地域の祭好きの方も参加してくれます。今も曽根崎に住み続けている人は少ないけれども、祭に参加してくれる人は増えてきているんです。そこが曽根崎のいいところですね」。

「付き合いは村みたいなかんじですよ。祭の役をやっている人は、だいたい、小学校の先輩だったり後輩だったり。毎年、知ってる子の成長を見ています。祭でつながっているかんじもあります」と笑って話されます。

そうしたつながりから、露天神社での奉納バリ舞踊もおこなわれたそうです。なんと、数年前までは、夏祭本宮の夕方、ちょうど宮入前で本殿前が空いている時間帯にバリ舞踊の奉納をしていたとか。「祭の準備とバリ舞踊の練習とガムランの練習が、1、2ヶ月続くんです。さすがに体力的に厳しくなってきて、夏祭に奉納舞踊をやるのはやめました」。昨年のバリ舞踊の奉納は、それ以来のことでした。

バリ舞踊との出会いと人生を変える大きな決断

そんな曽根崎と切っても切れない千晶さんがバリ舞踊に出会ったのは、大学受験を控えた頃。バリから舞踊団が来日し、東京、大阪をはじめ全国の主要都市で大々的に巡回公演をおこなったのでした。その模様をまとめたNHKの芸術劇場を見たとき、千晶さんのなかで、「目覚め」のようなものがあったようです。バリ舞踊がきっかけでインドネシアという国を知り、興味を持った千晶さんは、大阪外国語大学インドネシア語学科に進学します。そこで、バリ舞踊を習っている先輩に出会います。「当時はまだバリ舞踊なんて全然で、その教室も西日本で唯一のバリ舞踊教室だったんです。とても珍しかった。でも、習っている人がいて、教えてくれる人がいるならやってみよう、と。高校でソフトボールをしていたので、その代わりに何かをしようと思って、部活やサークルの感覚で通っていましたね」。

社会人になって3年半が過ぎた頃、大学卒業後もバリ舞踊を続けていた千晶さんに、転機が訪れます。通っていた教室が閉鎖されることになったのです。普通ならそこで終わってしまいそうなものです。でもそのとき、千晶さんの心には、「関西でバリ舞踊の灯が消えてしまうのは惜しい」という強い思いが生まれたと言います。

© 秦 晴夫

お稽古事としてバリ舞踊を終わらせるか、それとも自身でバリ舞踊教室を開くのか。「教室を開くなら、留学は必須でした。それはつまり会社を辞めるということです。でも、会社を辞めたくはなかったんです」。いい大学を出て、いい会社に入って、いい結婚相手を見つけて、20代で寿退社する…、そんな時代でした。バリ舞踊教室を開くというのは、そんな人生設計を180度転換する決断です。大きな葛藤がありました。

留学は、今ほど簡単でも手軽でもありませんでした。手続きの煩雑さは相当なもので、決めたらすぐにできるようなものではなかったそうです。そんななか、インドネシア政府が伝統芸能を学びたい人向けの奨学金制度を実施していました。この制度は、留学の手続きをスムーズに進められる唯一の手段でもありました。千晶さんは「これに合格したらバリに行こう」と思ったそうです。

「とはいえ、合格してもなかなか退職届が出せなくって。期限ギリギリまで踏ん切りがつかなかったですね。片方では留学の準備を進めていたのにね」。最後の最後まで思い悩みました。思い悩んだ末の留学でした。

「やってみよう。やるからにはちゃんとやろう」というチャレンジ精神と生真面目なほど努力を続ける強い意志が、最後には千晶さんの背中を押します。「合格したからにはバリに行こう」。

留学中、大学に籍を置きながら、お姫様踊りで有名な先生、男踊りが得意な先生など、それぞれの先生に直接習いました。バリ舞踊には「この人はこの踊り」というものがあり、それぞれが自分の舞踊を極めていきます。さらに「ガムランができないとちゃんと踊れない」ことから、バリの伝統音楽であるガムランも習います。「合格したからには行こう」から「留学したからには頑張ろう」。千晶さんの道は続き、バリ舞踊の基礎からさまざまな踊りまでを身に付けて、帰国後、念願のバリ舞踊教室を開きました。

聞き手・書き手／棚橋真理　撮影／浅香保ルイス龍太

神様を祀る気持ちは日本もバリも同じ。日本で、伝統的なバリ舞踊を伝えていきたい。

21年前のことです。

人ではないものになる踊り

「バリ舞踊は難しい」とは、千晶さんから何度も聞く言葉です。「一曲、人前で踊れるようになるのに最低1年はかかります」。短いものでも一曲7、8分。踊れるようになる身体づくりからはじめて、1年なのだそうです。

バリ舞踊は、踊りとガムランの音楽とが一体となった総合芸術です。その動きには、生活のなかの動作や自然の動きが取り入れられています。もともとは、バリで広く信仰されているバリ・ヒンズー教の神様を祀る踊りでした。神様に捧げるための踊りや、神様の依代になって踊る踊りです。その後、演劇としての踊りが生まれます。そこには叙事詩などの物語があり、踊るというよりも演じるという感覚のほうが近いのだとか。踊っている間、口元を閉じて微笑んでいるのは、歯を見せてはいけないから。かと思えば、男振りの踊りでは子どもが近寄れないほどの厳しい表情で踊ります。そう、バリ舞踊は感情表現がとても豊かなのです。指先や身体の動きばかりに気をとられていると、とても苦しいそうです。身体を思うように動かせるようになり、身体と心が一体となって踊れるようになると、気持ちよく踊れるようになると言います。一朝一夕で踊れるものではなく、続けていることで楽しさが増してくる、そんな踊りです。そうやって、自分の役の踊りを磨いていきます。高みに達すると、「普通の男の人が、一歩踊り出すだけで、もう、人ではないようなものになります。役になりきって、生身ではないものになります。それくらいになります」。感動して、踊りのあとに話しかけると、踊っているときとの違いが大きすぎて幻滅してしまうほどだとか。人を超えたものになる踊り。千晶さんはバリ舞踊のその奥深さに魅かれたそうです。そんな踊りが、バリでは繰り広げられています。

「バリの祭はすごいですよ。トランスする人も出てきます。踊っている人だったり、見ている人だったり。その場にいるだけで依代になってしまう人、いるんですよ」。祭は夜8時頃からはじまり、翌朝の4時頃まで続くところもあります。その間、入れ代わり立ち代わりいろんな人が踊り、ガムランが鳴り響きます。「ガムランの練習は、30人くらいのメンバーが集まって、祭の1、2ヶ月前からはじまります。それも1日3時間も4時間も。祭もすごいですけど、それまでの準備もすごいです」。その様子を見て、露天神社の祭にかかわっている千晶さんは「バリも日本も祭の練習はどこも同じだなって思いました」と、思わぬところでバリと日本の共通点を見つけたそうです。また、たくさんの神様がいるところも似ています。「バリも日本も八百万の神で、日本人もバリに行くと、バリの人と一緒になってどこでもありがたくお参りするし、バリの人も日本に来ると神社では鈴を鳴らし、お寺ではお線香の煙を頭からかぶります」。そんなこともあってか、「幼い頃から慣れ親しんでいる露天神社で奉納したくなるんです」と。

「バリの踊りはここ20年くらいで、大きく変わってきました。誰でも踊れるようになって、ショーやコンテストが増えてきました。祭での神秘的な踊りよりも、個人が見える踊りが増えてきています」。

バリ舞踊は過去の遺物ではなく、今も新作が生まれる伝統舞踊です。時代に合わせて変化していくことは止められません。バリ舞踊の変化を感じながらも、自身が魅了された、神秘的な、人ではないような世界の踊りを伝えていきたいと、千晶さんは語られます。「友人の言葉ですが、伝統舞踊って、支えられるものと背負うもの、両方あると思うんです」。日本で、関西でバリ舞踊が続いていくことを願って、千晶さんは今日も全力で踊っています。（終）

Balinese Dance